

2.4 フーリエ級数の収束

この節では、フーリエ級数展開で得られたフーリエ級数が収束する場合に、フーリエ級数が再び元の関数に収束 (一致) することを示しましょう。なお、ここで扱う関数は、**区分的に連続かつ区分的になめらかな**周期 2π の周期関数とします⁶ (p.28 参照)。

まず、区間 $[-\pi, \pi]$ で定義された関数 $f(x)$ を三角関数を使って

$$A_n(x) = \frac{c_0}{2} + \sum_{k=1}^n (c_k \cos kx + d_k \sin kx)$$

と近似したとします⁷。このとき、 $f(x)$ の $A_n(x)$ による **平均 2 乗誤差**

$$\delta_n^2 = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} |f(x) - A_n(x)|^2 dx$$

について、次の定理が成り立ちます。

定理 2.11 δ_n は $A_n(x)$ の係数 c_k, d_k がそれぞれ $f(x)$ のフーリエ係数 a_k, b_k のとき最小となる。

証明 $B_n(x) = \sum_{k=1}^n (c_k \cos kx + d_k \sin kx)$ とおくと、 $A_n(x) = \frac{c_0}{2} + B_n(x)$ となり、平均 2 乗誤差は

$$\delta_n^2 = \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} \left((f(x))^2 + \frac{c_0^2}{4} + (B_n(x))^2 - c_0 f(x) + c_0 B_n(x) - 2f(x)B_n(x) \right) dx$$

と書き直される。ここで、それぞれ

$$\int_{-\pi}^{\pi} \frac{c_0^2}{4} dx = \left[\frac{c_0^2}{4} x \right]_{-\pi}^{\pi} = \frac{c_0^2}{4} \pi - \left(\frac{c_0^2}{4} (-\pi) \right) = \pi \frac{c_0^2}{2},$$

$$\begin{aligned} \int_{-\pi}^{\pi} (B_n(x))^2 dx &= \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} c_k^2 \cos^2 kx dx + \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} d_k^2 \sin^2 kx dx + \sum_{k=1, l=1}^{n, n} \int_{-\pi}^{\pi} c_k d_l \cos kx \sin lx dx \\ &\quad + \sum_{k \neq l} \int_{-\pi}^{\pi} c_k c_l \cos kx \cos lx dx + \sum_{k \neq l} \int_{-\pi}^{\pi} d_k d_l \sin kx \sin lx dx \\ &= \sum_{k=1}^n c_k^2 \int_{-\pi}^{\pi} \cos^2 kx dx + \sum_{k=1}^n d_k^2 \int_{-\pi}^{\pi} \sin^2 kx dx + \sum_{k=1, l=1}^{n, n} c_k d_l \int_{-\pi}^{\pi} \cos kx \sin lx dx \\ &\quad + \sum_{k \neq l} c_k c_l \int_{-\pi}^{\pi} \cos kx \cos lx dx + \sum_{k \neq l} d_k d_l \int_{-\pi}^{\pi} \sin kx \sin lx dx \\ &= \sum_{k=1}^n \pi c_k^2 + \sum_{k=1}^n \pi d_k^2 + 0 + 0 + 0 = \pi \sum_{k=1}^n (c_k^2 + d_k^2), \end{aligned}$$

⁶フーリエ級数を用いた解析では、区分的に連続という条件を入れても応用上十分であることがほとんどなので、区分的に連続であることを仮定しておきます。また、周期については、周期の伸縮によって任意の周期にすることができますが、簡単のため周期を 2π に固定して話を進めます。

⁷フーリエ級数の部分和とは異なります。

$$\begin{aligned}
\int_{-\pi}^{\pi} f(x) dx &= \pi a_0, \\
\int_{-\pi}^{\pi} B_n(x) dx &= \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} c_k \cos kx dx + \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} d_k \sin kx dx \\
&= \sum_{k=1}^n c_k \int_{-\pi}^{\pi} \cos kx dx + \sum_{k=1}^n d_k \int_{-\pi}^{\pi} \sin kx dx = 0 + 0 = 0, \\
\int_{-\pi}^{\pi} f(x) B_n(x) dx &= \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} f(x) c_k \cos kx dx + \sum_{k=1}^n \int_{-\pi}^{\pi} f(x) d_k \sin kx dx \\
&= \sum_{k=1}^n c_k \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \cos kx dx + \sum_{k=1}^n d_k \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin kx dx \\
&= \sum_{k=1}^n c_k (\pi a_k) + \sum_{k=1}^n d_k (\pi b_k) = \pi \sum_{k=1}^n (a_k c_k + b_k d_k)
\end{aligned}$$

となる。したがって、平均2乗誤差は

$$\begin{aligned}
\delta_n^2 &= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} (f(x))^2 dx + \frac{1}{2} \left(\frac{c_0^2}{2} + \sum_{k=1}^n (c_k^2 + d_k^2) - c_0 a_0 - 2 \sum_{k=1}^n (a_k c_k + b_k d_k) \right) \\
&= \frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} (f(x))^2 dx + \frac{1}{2} \left(\frac{(c_0 - a_0)^2}{2} + \sum_{k=1}^n ((c_k - a_k)^2 + (d_k - b_k)^2) \right) \\
&\quad - \frac{1}{2} \left(\frac{a_0^2}{2} + \sum_{k=1}^n (a_k^2 + b_k^2) \right)
\end{aligned}$$

となり、 $c_k = a_k$ ($k = 0, 1, 2, \dots$) および $d_k = b_k$ ($k = 1, 2, 3, \dots$) のとき、すなわち、フーリエ係数のとき最小となる。 ■

ここで、 $\delta_n^2 \geq 0$ に注意して $c_k = a_k$ かつ $d_k = b_k$ とすると、不等式

$$\frac{a_0^2}{2} + \sum_{k=1}^n (a_k^2 + b_k^2) \leq \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} (f(x))^2 dx$$

が成り立ちます。この不等式は n がいくつでも成り立つことから、次の系を得ます。

系 2.12 (ベッセル (Bessel) の不等式) 関数 $f(x)$ のフーリエ係数 a_k, b_k に対して、不等式

$$\frac{a_0^2}{2} + \sum_{k=1}^{\infty} (a_k^2 + b_k^2) \leq \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} (f(x))^2 dx$$

が成り立つ。

なお、関数 $f(x)$ のフーリエ級数の部分和を

$$S_n(x) = \frac{a_0}{2} + \sum_{k=1}^n (a_k \cos kx + b_k \sin kx)$$

とおき、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \int_{-\pi}^{\pi} |f(x) - S_n(x)|^2 dx = 0$$

を満たせば、ベッセルの不等式の等号が成り立ち、等式

$$\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} (f(x))^2 dx = \frac{a_0^2}{2} + \sum_{k=1}^{\infty} (a_k^2 + b_k^2)$$

が成り立ちます⁸。この等式は**パーセバル (Parseval) の等式**と呼ばれます。また、ベッセルの不等式より、直ちに次の定理が得られます。

定理 2.13 (リーマン (Riemann) ・ ルベーク (Lebesgue) の定理) 関数 $f(x)$ のフーリエ係数 a_k, b_k に対して、

$$a_k = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \cos kx dx \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty),$$

$$b_k = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin kx dx \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty)$$

が成り立つ。

それでは、いくつか準備を行なった後に、フーリエ級数の収束について証明しましょう。

補題 2.14 (区分的に連続な) 関数 $f(x)$ に対して、 n を自然数とすると、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin \left(n + \frac{1}{2} \right) x dx = 0$$

が成り立つ。

証明 まず、

$$\begin{aligned} & \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \sin \left(n + \frac{1}{2} \right) x dx \\ &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} \left(f(x) \sin \frac{1}{2} x \right) \cos nx dx + \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} \left(f(x) \cos \frac{1}{2} x \right) \sin nx dx \end{aligned}$$

と展開する。ここで、関数 $f(x)$ が区分的に連続な関数であるから、 $f(x) \sin \frac{x}{2}, f(x) \cos \frac{x}{2}$ は、再び区分的に連続な関数となる。したがって、上式の両辺にそれぞれ極限をとれば、リーマン・ルベークの定理より、その極限值は 0 となる。 ■

⁸関数 $f(x)$ が連続関数かつ積分可能で、 $S_n(x)$ が一様収束するときに等号が成立します。すなわち、任意の $\varepsilon > 0$ に対して $|f(x) - S_n(x)| < \varepsilon$ が成り立つときに等号が成立します。なお、不連続な点 x を含む関数の場合は、

$$\frac{f(x+0) + f(x-0)}{2} \rightarrow f(x)$$

と定義し直すことで、 $S_n(x)$ が一様収束し、パーセバルの等式が成り立ちます。もちろん、区分的に連続と区分的になめらかという条件が入ります。

補題 2.15 n を自然数とするとき、等式

$$\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{2 \sin \frac{1}{2}x} dx = \frac{1}{2}, \quad \frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{2 \sin \frac{1}{2}x} dx = \frac{1}{2}$$

が成り立つ。

証明

$$2 \cos kx \sin \frac{1}{2}x = \sin\left(k + \frac{1}{2}\right)x - \sin\left(k - \frac{1}{2}\right)x$$

より、

$$\begin{aligned} & \left(\frac{1}{2} + \cos x + \cos 2x + \cdots + \cos nx\right) \cdot \sin \frac{1}{2}x \\ &= \frac{1}{2} \left(\sin \frac{1}{2}x + \left(\sin \frac{3}{2}x - \sin \frac{1}{2}x\right) + \left(\sin \frac{5}{2}x - \sin \frac{3}{2}x\right) + \left(\sin \frac{7}{2}x - \sin \frac{5}{2}x\right) + \cdots \right. \\ & \quad \left. + \left(\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x - \sin\left(n - \frac{1}{2}\right)x\right) \right) \\ &= \frac{1}{2} \sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x \end{aligned}$$

となる。両辺を $\sin \frac{1}{2}x$ で割ると

$$\frac{1}{2} + \cos x + \cos 2x + \cdots + \cos nx = \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{2 \sin \frac{1}{2}x}$$

を得る。したがって、

$$\int_{-\pi}^0 \cos kx dx = \left[\frac{1}{k} \sin kx \right]_{-\pi}^0 = 0$$

に注意して、上式の両辺を定積分すると

$$\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{2 \sin \frac{1}{2}x} dx = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 \left(\frac{1}{2} + \cos x + \cos 2x + \cdots + \cos nx\right) dx = \frac{1}{\pi} \left[\frac{1}{2}x \right]_{-\pi}^0 = \frac{1}{2}$$

を得る。同様に、

$$\frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{2 \sin \frac{1}{2}x} dx = \frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} \left(\frac{1}{2} + \cos x + \cos 2x + \cdots + \cos nx\right) dx = \frac{1}{\pi} \left[\frac{1}{2}x \right]_0^{\pi} = \frac{1}{2}$$

を得る。 ■

補題 2.16 関数 $f(x)$ のフーリエ級数の部分 $S_n(x)$ を

$$S_n(x) = \frac{a_0}{2} + \sum_{k=1}^n (a_k \cos kx + b_k \sin kx)$$

とすると、

$$S_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(t+x) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt$$

と変形できる⁹。

証明

$$a_k \cos kx + b_k \sin kx$$

$$\begin{aligned} &= \left(\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \cos ku \, du \right) \cos kx + \left(\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \sin ku \, du \right) \sin kx \\ &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) (\cos ku \cos kx + \sin ku \sin kx) \, du \\ &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \cos k(u-x) \, du \end{aligned}$$

より、

$$\begin{aligned} S_n(x) &= \frac{a_0}{2} + \sum_{k=1}^n (a_k \cos kx + b_k \sin kx) \\ &= \frac{1}{2} \left(\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \, du \right) + \sum_{k=1}^n \left(\frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \cos k(u-x) \, du \right) \\ &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \left(\frac{1}{2} + \sum_{k=1}^n \cos k(u-x) \right) \, du \end{aligned}$$

と変形できる。ここで、補題 2.15 の証明の前半部分から

$$\frac{1}{2} + \sum_{k=1}^n \cos k(u-x) = \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)(u-x)}{2 \sin \frac{1}{2}(u-x)}$$

を得て、

$$S_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(u) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)(u-x)}{2 \sin \frac{1}{2}(u-x)} \, du$$

⁹この積分をディリクレ (Dirichlet) 積分といい、 $\frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t}$ をディリクレ (Dirichlet) 核といいます。

と変形できる。さらに、 $t = u - x$ において変数変換すると、

$$S_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi-x}^{\pi-x} f(t+x) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt$$

を得る。このとき、関数 $f(x)$ は周期 2π の関数であるから、1周期であればどの区間で積分しても積分の値は変わらない。したがって、

$$S_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} f(t+x) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt$$

を得る。 ■

補題 2.17 関数 $f(x)$ が区分的に連続かつ区分的になめらかなとき、

$$\frac{f(x+t) - f(x-0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \text{ は } -\pi \leq t \leq 0 \text{ で、}$$

$$\frac{f(x+t) - f(x+0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \text{ は } 0 \leq t \leq \pi \text{ で、}$$

それぞれ区分的に連続である。

証明 関数 $f(x)$ が区分的に連続であるから、

$$\frac{f(x+t) - f(x-0)}{2 \sin \frac{1}{2}t}$$

は、任意の数 a ($-\pi < a < 0$) に対して、 $-\pi \leq t \leq a$ で区分的に連続である。 $t = -0$ については、

$$\begin{aligned} \lim_{t \rightarrow -0} \frac{f(x+t) - f(x-0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} &= \lim_{t \rightarrow -0} \frac{f(x+t) - f(x-0)}{t} \cdot \frac{\frac{1}{2}t}{\sin \frac{1}{2}t} \\ &= \lim_{t \rightarrow -0} \frac{f(x+t) - f(x-0)}{t} \quad (\because \lim_{h \rightarrow \pm 0} \frac{\sin h}{h} = 1) \end{aligned}$$

となる。ここで、関数 $f(x)$ が区分的になめらかであるから、

$$\lim_{t \rightarrow -0} \frac{f(x+t) - f(x-0)}{t} = \lim_{t \rightarrow -0} \frac{f(x-0+t) - f(x-0)}{t} = f'(x-0) \quad (\neq \pm\infty)$$

となる。したがって、与式は $-\pi \leq t \leq 0$ で区分的に連続である。同様に、

$$\frac{f(x+t) - f(x+0)}{2 \sin \frac{1}{2}t}$$

は $0 \leq t \leq \pi$ で区分的に連続である。 ■

準備が整ったので、フーリエ級数の収束を証明しましょう。次の定理を得ます。

定理 2.18 関数 $f(x)$ が周期 2π を持ち、区間 $[-\pi, \pi]$ で区分的に連続かつ区分的になめらかであれば、 $f(x)$ のフーリエ級数は、

- $f(x)$ が連続な点 x で $f(x)$ に収束し、
- $f(x)$ が不連続な点 x で $\frac{f(x+0) + f(x-0)}{2}$ に収束

する。

証明 関数 $f(x)$ のフーリエ級数の部分 and を $S_n(x)$ とすると、補題 2.16 より、

$$S_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 f(t+x) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt + \frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} f(t+x) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt \quad \dots \textcircled{1}$$

となる。また、補題 2.15 より、

$$\frac{f(x+0) + f(x-0)}{2} = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 f(x-0) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt + \frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} f(x+0) \frac{\sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{2 \sin \frac{1}{2}t} dt \quad \dots \textcircled{2}$$

となる。上の 2 式から、① - ② を計算すると、

$$S_n(x) - \frac{f(x+0) + f(x-0)}{2} = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^0 \frac{f(t+x) - f(x-0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t dt \quad \dots \textcircled{3}$$

$$+ \frac{1}{\pi} \int_0^{\pi} \frac{f(t+x) - f(x+0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \sin\left(n + \frac{1}{2}\right)t dt \quad \dots \textcircled{4}$$

となる。ここで、補題 2.17 より、

$$\frac{f(t+x) - f(x-0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \text{ は } -\pi \leq t \leq 0, \quad \frac{f(t+x) - f(x+0)}{2 \sin \frac{1}{2}t} \text{ は } 0 \leq t \leq \pi$$

で区分的に連続である。したがって、補題 2.14 より、 $n \rightarrow \infty$ のとき、③式と④式はそれぞれ 0 に収束する。すなわち、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} S_n(x) = \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{f(x+0) + f(x-0)}{2} = \frac{f(x+0) + f(x-0)}{2}$$

を得る。なお、 $f(x)$ が連続な点 x の場合は、 $f(x+0) = f(x-0) = f(x)$ が成り立ち、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} S_n(x) = \frac{f(x+0) + f(x-0)}{2} = f(x)$$

を得る。 ■

それでは、**区分的に連続かつ区分的になめらかな関数**の不連続点におけるフーリエ級数の収束の様子を観察しておきましょう。例として、前に挙げた (p.34 参照)、周期 2π を持つ関数 (三角波)

$$f(x) = \begin{cases} 0 & (-\pi \leq x < 0), \\ x & (0 \leq x < \pi) \end{cases}$$

の不連続点におけるフーリエ級数の収束の様子を見て行きましょう。この関数の不連続点

$$x = 0 \quad \text{および} \quad x = \pi$$

において、

$$\text{左側極限 } f(x+0) \neq \infty \quad \text{および} \quad \text{右側極限 } f(x-0) \neq \infty$$

が存在し、導関数 $f'(x)$ の

$$\text{左側極限 } f'(x+0) \neq \infty \quad \text{および} \quad \text{右側極限 } f'(x-0) \neq \infty$$

も存在するため、関数 $f(x)$ は**区分的に連続かつ区分的になめらかな関数**となります。したがって、先ほど証明した定理 2.18 によって、これら不連続点で関数 $f(x)$ のフーリエ級数は、

$$\frac{f(0+0) + f(0-0)}{2} = \frac{0+0}{2} = 0 \quad \text{および} \quad \frac{f(\pi+0) + f(\pi-0)}{2} = \frac{0+\pi}{2} = \frac{\pi}{2}$$

に収束します。確認のため、この関数のフーリエ級数を求め、その部分

$$S_k(x) = \frac{\pi}{4} + \sum_{n=1}^k \left(-\frac{1 + (-1)^{n-1}}{n^2\pi} \cos nx + \frac{(-1)^{n-1}}{n} \sin nx \right)$$

のグラフを描いてみると、図 2.8 ($k = 1, 2, 10, 100$) のようになり、 k が大きくなるにつれて部分

和 $S_k(x)$ が関数 $f(x)$ に収束していく様子が観察できます。

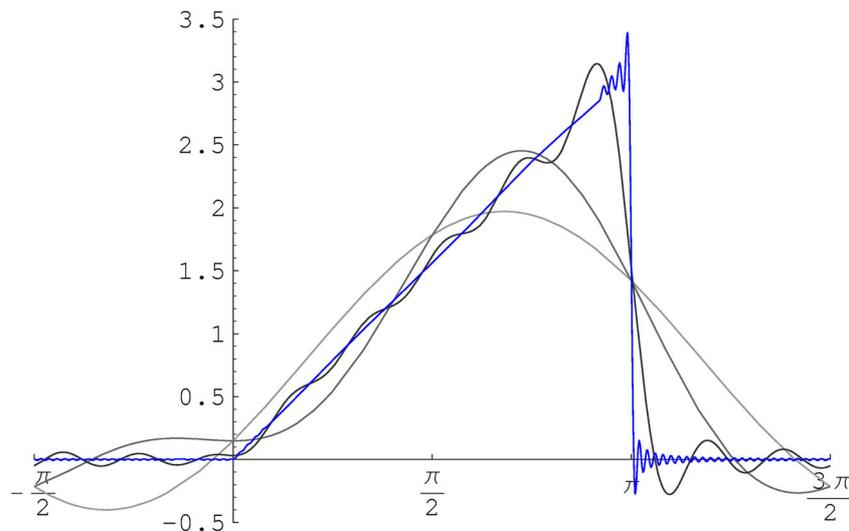


図 2.8: 不連続点における収束の様子 (1)

このとき、不連続点 $x = 0$ および $x = \pi$ の値について近似値を計算してみると表 2.4 のようになり、

$$S_k(0) \rightarrow 0 \quad \text{および} \quad S_k(\pi) \rightarrow \frac{\pi}{2} = 1.570796327 \dots \quad (k \rightarrow \infty)$$

に収束していることがわかります。

k	$S_k(0)$ の近似値	$S_k(\pi)$ の近似値
1	0.1487783910	1.422017936
2	0.1487783910	1.422017936
3	0.0780428607	1.492753466
10	0.0317263262	1.539070001
100	0.0031829927	1.567613334
1000	0.0003183097	1.570478017
10000	0.0000318309	1.570764496
∞	0.0000000000	1.570796327

表 2.4: 不連続点における近似値 (1)

もう 1 つの例として、図 2.9 のように半円を並べた周期 2 を持つ関数

$$f(x) = \sqrt{1-x^2} \quad (-1 < x \leq 1)$$

の不連続点におけるフーリエ級数の収束の様子を観察しておきましょう。

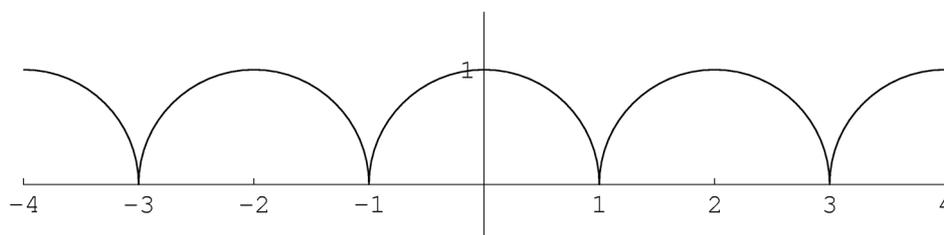


図 2.9: 区分的になめらかでない関数

この関数の不連続点

$$x = 1$$

において、

$$\text{左側極限 } f(1+0) = 0 \quad \text{および} \quad \text{右側極限 } f(1-0) = 0$$

が存在していることから、関数 $f(x)$ は区分的に連続な関数となりますが、同点において、導関数 $f'(x) = -\frac{x}{\sqrt{1-x^2}}$ の

$$\text{左側極限 } f'(1+0) = -\infty \quad \text{および} \quad \text{右側極限 } f'(1-0) = -\infty$$

が存在していないことから、関数 $f(x)$ は**区分的になめらかでない**関数となります。したがって、この関数が定理 2.18 の条件を満たさないことから、関数 $f(x)$ のフーリエ級数は、

$$\frac{f(x+0) + f(x-0)}{2}$$

に収束するとは限りません。しかしながら、前例と同様に、この関数のフーリエ級数を求め¹⁰、その部分

$$S_k(x) = \frac{\pi}{4} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{J_1(k\pi)}{n} \cos n\pi x$$

のグラフを描いてみると、図 2.10 ($k = 1, 2, 10, 100$) のようになり、 k が大きくなるにつれて部分 $S_k(x)$ が関数 $f(x)$ に収束していく様子が観察できます。ただし、 $J_m(z)$ は**ベッセル (Bessel) 関数**と呼ばれるもので、円柱対称系における微分方程式を解くために利用される関数です¹¹。

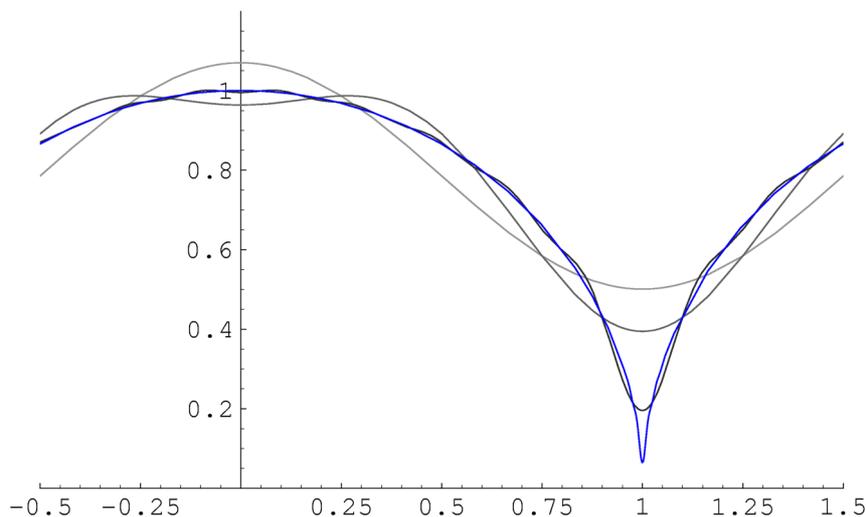


図 2.10: 不連続点における収束の様子 (2)

このとき、不連続点 $x = 1$ の値について近似値を計算してみると表 2.5 のようになり、

$$S_k(1) \rightarrow 0 \quad (k \rightarrow \infty)$$

に収束していることがわかります (特別な例といえます)。

¹⁰区分的に連続であれば積分可能となり、とりあえずフーリエ級数展開できるため、収束するかしないかは別にしてフーリエ級数を得ることができます。

¹¹ベッセル関数 $J_m(z)$ は、微分方程式

$$z^2 y'' + zy' + (z^2 - m^2)y = 0$$

の線形独立な解として与えられる関数です。ただし、 m は実数とします。

k	$S_k(1)$ の近似値
1	0.5007828202
2	0.3945915552
3	0.3356831555
10	0.1956704277
100	0.0634780940
1000	0.0201258528
10000	0.0063660132
∞	0.0000000000

表 2.5: 不連続点における近似値 (2)

(メモ用紙)